

高麗人の観相

三歳の夏に母桐壺更衣を亡くし、六歳で祖母を亡くした光源氏は、父桐壺帝のもとで愛情を一身に受けて育つ。七歳になつた彼の美しさと聡明さは、宮中の人々を驚かせるほどであつた。

そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こし召して、宮の内に召さむことは宇多帝の御誠めあれば、いみじう忍びてこの皇子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率て奉るに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしむ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし。」と言ふ。

弁も、いと才かしこき博士にて、言ひ交はしたることどもなむいと興ありける。文など作り交はして、今日明日帰り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへをおもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作り給へるを、限りなうめで奉りて、いみじき贈り物どもを捧げ奉る。朝廷よりも多くの物賜はず。おのづから事ひろごりて、漏らさせ給はねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかと思し疑ひてなむありける。

帝、かしこき御心に、倭相を仰せて思しよりにけるすぢなれば、今までこの君を親王にもなさせ給はざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと思して、無品親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめることと思し定めて、いよいよ道々の才を習はさせ給ふ。際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となり給ひなば世の疑ひ負ひ給ひぬべくものし給へば、宿曜のかしこき道の人に勘へさせ給ふにも同じさまに申せば、源氏になし奉るべく思しおきてたり。

(桐壺)

臣籍に降下した光源氏は十二歳で元服し、左大臣の娘葵の上と結婚する。しかし、光源氏の心には、母に生き写しといわれる父帝の妃藤壺宮への思慕が深く、いつか藤壺のような人を妻として迎えたいと思うのだった。

【口語訳】

そのころ、高麗人が参上していた中に、優れた人相見がいたのを（帝が）お聞きになって、宮中に（外国人を）お呼びになることは宇多天皇の御戒めがあるので、特に内密にしてこの皇子を鴻臚館におやりになった。ご後見役のようにしてお仕えする右大弁の子のように思わせてお連れ申し上げると、人相見は驚いて、何度も首をかき上げて不思議がる。「国の親となって、帝王という最上の地位にのぼるはずの相がおありになる方だが、そちらから見ると、（世が）乱れ（民が）苦しむことがあるかもしれない。朝廷を支える高官となって、天下の政治を補佐する方として見ると、またその相でもないようだ。」と言う。

右大弁も、非常に学才の優れた博識な人であって、（高麗人と）語り合ったさまざまなことはたいそう興味あるものだった。漢詩などを互いに作り合つて、今日明日にも帰国しようとする時に、このようにめつたにいない人に会つた喜びは、（すぐに別れなければならぬため）かえって悲しいに違いないという気持ちをおもしろく詩に作つたところ、皇子もたいへんしみりとして趣深い詩句をお作りになったので、（人相見は）この上なくお褒め申し上げて、立派な贈り物の数々を献上する。朝廷からも多くの物を（高麗人に）お与えになる。自然とこの（観相の）ことが世間に広まって、（帝が）口外なすることはないが、皇太子の祖父の右大臣などは、どういふことなのかと疑念をいだいていらつしやつた。

帝は、畏れ多い御心によつて、日本流の観相をお命じになって、すでにお考えをいだいていらつしやつたことなので、今までこの君を親王にもなさらなかつたのだが、（この高麗人の）人相見は実に賢明なことよと思ひになつて、（皇子を）無位の親王で母方の親戚の後見がない状態のまま不安定な生涯を送らせるようなことはするまい、自分の治世も（いつまで続くか）まったく定まっていけないのだから、臣下として朝廷の補佐をするのが将来も心強そうだご決心なさつて、ますます政治家として必要な、多方面にわたる学問を習わせなされる。（皇子は）格別に賢くて、臣下とするには非常に惜しいが、もし親王におなりになつたならば世間の疑いをきつとお受けになるに違ひなくいらつしやるので、占星術の優れた専門家に判断させなさらつても同じように申し上げるので、（臣籍に下し）源氏にして差し上げようと思ひ定めなさらつた。